

2012 年 5 月 7 日

存在と言語

小山照夫 国立情報学研究所

1. はじめに

1.1. 存在者の意味

人間は通常その身体的感覚を解釈することに基づいて、様々な存在者に囲まれていると認識している。これらの存在者がそもそも何であるかという疑問は、古代ギリシャからの哲学的課題として提示されてきた。古典的な哲学的立場からは、存在者が自体的に何であるかという形で問題が設定されるが、しかしこのような問題設定は本当に妥当なものであろうか。

仮に存在者の自体的な本質があるとして、例えばそれが主体としての人間に全く関係を持たないとすれば、それは主体の認識対象として意味のあるものであろうか。むしろ問題は存在者が主体にとってどのような意味を持つかではなかろうか。そこで問題となるのが、主体としての人間にとっての存在者の意味とは何であるかである。

1.2. 欲望と意味

もし、人間の本質がその欲望に従い、欲望達成のために行動するものであると考えるなら、この問題は結局は存在者が主体の欲望と行動に対してどのような影響を及ぼすか、あるいは及ぼす可能性を持っているかという問題に帰着させることができるであろう。

人間は感覚器官を備えているが、これらの器官を通じて得られる感覚刺激を、その身体性に基づいて空間的・時間的に分節された感覚像として捉えることを学習する。結果として分節された時空はそれぞれ、もの、ないしは出来事として、独立した存在者であると想定されることになる。したがって問題はこれらの存在者が主体の欲望の達成、またそのための行動に関連してどのような影響を及ぼすか、また及ぼす可能性を持つかであると考えてよい。

存在者を主体の欲望達成とそのための行動という視点から見ると、それは第一次的には存在者の欲望の対象となるか、欲望達成の手段となるか、あるいは欲望達成の障害となるかである。また一方ではこれらの直接的関係とは別に、ある存在者が他の存在者を示唆する、「記号」として機能し、指示される存在者が主体の欲望に関係を持つ場合も考えられる。存在者が別の存在者への記号として機能するのは、両者の時空上の共起傾向が十分強い場合や両者が顕著な特徴を共有している場合などが考えられる。

ある存在者が他の存在者の記号として働くとき、本来の意味は指示される存在者にのみ与えられるが、しかし指示関係が成立することに基づいて同じ意味が指示する存在者にも関連付けられることになる。記号的指示関係は存在者の意味をより多様なものにするであろう。

主体としての人間は、一般には複雑な欲望の体系を持っている。すると人間にとっての存在者の意味は、その存在者が関係しうる欲望と欲望に対する役割の分だけ、また、他の存在者への記号となりうる分だけ考えられることになる。

2. 欲望と存在者の属性

2.1. 欲望と属性

ところで、欲望との直接的関連で考えるなら、そこで問題となるのは存在者そのものであるというよりは、存在者の備える属性であると考えることができる。食欲に対する食べ物というものを考えるなら、それが欲望の対象となりうるために第一義的に問題となるのは口に入れて満腹感をあたえてくれ、同時に安全である

ことである。また、口当たりが良くて食べるときの満足感を助長してくれることも重要である。これらはいずれも存在者の備える属性であると考えられる。そこで問題となるのが、主体が特定の存在者に会ったとき、その存在者が主体の欲望に関係するどのような属性を持つかをいかにして知ることができるかである。

2.2. 属性の了解

問題とする属性が視覚や嗅覚などの外的な感覚像として直接捉えられる場合は、存在者が特定の欲望と関連を持つかどうかの問題は自明である。しかし、例えば食べて満足感が得られるかどうかなどは、一般には対照となる存在者と直接の関係に入る以前には、外的な感覚像としては捉えることのできないものである。このように実際には欲望の視点から問題となる属性が外的な感覚像として直接に認知できない場合が数多くありうる。それでは実際にはどうすれば良いのだろうか。

ここでもし、あらゆる対象について、外形的に捉えることのできない属性を実際に備えているかどうかを、それぞれの存在者について実際にそのつどいちいち確認することが現実的であるかといえ、これは一般に困難であるし、しばしば危険を伴う可能性もあろう。

この問題に対して、人間をはじめとする動物は、外的な感覚像の類似性と過去の経験から、外的には把握できない属性の類似性を推定していると考えられる。ここでは経験から、外的な属性が十分に類似しているならば、欲望や行動に関係する見えない属性も備えているであろうとする推論が行われていることになる。別の見方からすると、外的に観測可能な特定の感覚像あるいは感覚像の組み合わせが記号として機能することにより、存在者が問題とする属性を持つことを判断する方法を学習すると考えることもできよう。

ここでもちろん、類似性を判断するにあたって外的感覚像のどのような特徴を重視すべきかは、目的とする属性毎に異なっており、それぞれの場合に応じて判断基準を学習する必要はあるが、一旦学習が行われてしまえば外形的ないくつかの特徴に基づいて、対象がどのような属性を持つかを推定できるようになると考えて良い。

外的な感覚像を用いて属性に関する推定ができるなら、問題とする存在者がどのような欲望と関連を持ち得るかも推定できることになり、主体に対する意味づけが了解されることになる。ここでは存在者の持つ属性の間の記号関係が成立しているとも見ることができよう。

属性を通じての存在者の欲望との関係、あるいは存在者の意味づけが、外形的感覚像の類似性から導出されるプロセスは多くの動物に共通していると考えられるが、人間の場合このプロセスに、単なる感覚的な類似性に加えて言語記号による存在者の「名付け」が行われるところに特徴がある。この名付けの効果により、人間にとって存在者は多くの動物よりもはるかに多様な意味を持つこととなる。

3. 意味と言語

人間は言語の使用を学習する動物である。言語を習得した人間としての主体は、個々の存在者に遭遇するとき、依然として一般の動物と同様に、感覚像の類似性に基づいてどのような欲望や行動と関連しうるかを類推していると考えられるのだが、しかしそれと同時に、その存在者が言語的に何と呼ばれるかも併せて了解することになる。このことがいくつかの面で存在者の意味に関係してくることになる。

3.1. 同一記号の下での存在者集合

主体がある存在者を特定の言語記号に関連付ける時、同一の言語記号に対応付け可能な存在者は一般に複数存在する。このことから、その言語記号の下で想定される抽象的存在者集合が想起されることになるであろう。この抽象的集合が多様な存在者の均一視を助長することになる。実際に個々の存在者を考えるなら、たとえ同一の言語記号で指示される存在者であってもそれらの持つ属性は、個体ごとに様々に異なったものでありうる。個々の存在者はそれぞれに独自の属性を持ち、そのことが個体を識別する手がかりになっているのだが、これらの存在者が一旦一つの言語記号に関連付けられるとき、主体はこれらの存在者の集合を均質なものとして捉える傾向を示す。

個別の存在者の多様性を欲望という視点から見ると、同一言語記号で指示されるものであっても、その内のあるものは特定の欲望と関係を持つ上で必要な属性を備えているかもしれないが、しかし別の存在者は同一の言語記号で指示されているにも関わらず、必要な属性を備えていないこともありうる。

例えば十分に熟していない柿は、一般には食欲との関わりを持っていないが、にもかかわらず、特定の特徴を備えた木の一部として感覚されるなら、それが「柿」という言語記号で指示可能であることは了解できることになるであろう。

ここで、同一の言語記号で指示されるという事実から、実は必要な属性を備えていない存在者であっても、欲望との関わりを可能性としては持つという判断が生じることになる。

このことは見方を変えれば、単なる外形上の類似性を越えて、存在者の中に多様な欲望との関わりの可能性を見出すことでもある。このこと自体、人間にとって名前付けられた存在者の意味を多様なものとする効果を持つであろう。また、同時に名前付けられた存在者に関わる意味の総体というものに興味が持たれることにもつながる。これは古典的な存在論が課題としてきた問題であると言えよう。

3.2. 個別存在者から乖離した言語記述

言語はその性質から、直接感知可能な感覚像とは独立した事物について語ることを可能にする。言い換えるなら、実際に感覚像として捉えていない、個別の個体として現前していないような存在者について語る、あるいは思考することが可能になるが、このことがさらに存在者の意味を複雑なものとする。

言語記号に基づいて、現前しない存在者が想定される場合、想定される存在者の属性に関して、その存在者を直接感覚の対象とすることに由来する制約は存在しない。もちろん一つの言語記号で指示される存在者については、過去の経験に基づいて、およそのところ共通する属性の集合が想定されているわけであるが、しかしそれでも存在者のいくつかの属性に関して自由な仮定を行うことが全くできなくなるわけではない。結果としては、これまで体験したことのない属性ないしは属性の組み合わせを持つ存在者について思考することが可能となる。

この時、想定される存在者の属性は主体の欲望から導かれると考えられるであろう。主体はその思考の中で、新しい欲望対象を発見しながら、同時に既存の、あるいは新しい欲望の達成を目指していかなる行動が有効であるかを検討する。ここでは欲望が達成される可能性およびそのための条件についてさまざまな状況が想定されることとなる。ここで、関連する存在者に特定の属性が備わっていれば欲望達成のための行動が明確になる場合、そのような属性を持つ存在者を想定してみることは自然な発想ということになる。ここでは想定される存在者が要求される属性を持つことが実際に可能であるかどうかはとりあえずは問題としない。

これはフィクションを構成する基本となる思考傾向であると言いうことができるのであり、過剰一般化としての誤謬推論の根底にある傾向であると言えるであろう。誤謬推論から導かれる結論の多くは実際には役立たないものかもしれないが、なかには実際に有効なものが含まれている可能性がある。欲望の観点からは、健全な推論では導けない有効なものが見つかる可能性があるなら、それは有用な推論であると言えるであろう。

欲望という観点から望ましい属性を付与された存在者は、その現実性が保証されていないところから、フィクションの上だけの存在者である可能性もある。しかし一方ではそれが現実のものである可能性が完全に排除されるわけではない。

いずれにせよ、想定される存在者の属性は、それが欲望に関連する限りでは意味を持つものである。したがって想定された存在者は思考の中で付与された意味を持つとされるのであり、さらには存在者を指示する言語記号に関連するすべての存在者も可能性としてはそれらの意味を付与されることになる。

3.3. 言語記号間の指示関係

ところで二つの異なった存在者が共通の意味を持つかどうか、その基本には存在者に由来する感覚像の類似が存在していた。言語のそもそもの現れを考えるなら、それは言語記号から構成されるものであって、これらの記号の提示されたものは、感覚可能な存在者でもある。すなわち、それらは人間に対して、音韻系

列や文字形状などの感覚像として提示されることになる。

これらの感覚像は、記号として指示する対象の意味とは独立して、それら自体の間に相互に類似性や共起傾向を持ち得る。このことは言語記号のレベルでの感覚像の類似性に基づく同一化や、また共起や属性類似による、記号から記号への記号化などが成立しうることを意味している。

つまり個々の言語記号はそれぞれが様々な存在者に対する指示であると同時に、他の言語記号への指示でもありうることになる。すると、ここでは言語記号間の記号関係に基づく意味の推移が存在することになる。語呂合わせなどで類似の音韻を持つ二つの言語記号を同時に想起することにより、それぞれの記号に新しいニュアンスが生じるなどはこの効果の例であるといえよう。

このように、記号から記号への対応関係は、記号の下に総括される存在者の意味をさらに追加することとなる。人間は言語を通じて記号関係を高度に展開することによって、言語記号に関連する意味をほとんど無限に拡張していくし、それによって存在者の意味、すなわち主体との欲望との関係も拡張していくことになるであろう。

純粋な言語の場としての思考の中では、拡張された意味により、言語の指示対象は極めて広範な文脈の下で参照されることとなる。これは一面では誤謬推論という形で非現実的なフィクションを構成することになるが、また一面では現実存在者の新しい特性を明かにすることにもつながるのであり、様々な知識を獲得していく源泉ともなりうるものと言える。

4. 欲望の多様性

ところで欲望その物について言えば、人間は複雑な社会組織を獲得したが故に、多くの動物とは比較にならない複雑な欲望の体系の下で生きることとなったと言えよう。

もともと動物にとって基本的な欲望は利己遺伝子であって、自身の遺伝子を子孫の中に保存しようとするものであると考えられる。しかし、群を構成する動物では、群の中の個体の相対的な位置が遺伝子保存に直接関わって来るが故に、群の中の位置というものが欲望の対象となる。ただ、そうは言っても一般の動物の場合、たとえ群を構成するものであっても、その構造は相対的に単純なものに留まる。

一方で言語を持つ人間は、生産手段を獲得することにより、群の構造を高度に複雑なものとしてきている。例えば一人の人間は様々な集団に属しているのであり、また、集団相互の間にも様々な関係が存在している。

人間は一般には複数の群の中での位置の問題を同時に想定することになる。群の間の様々な関係は、それぞれの群の中での位置に関して相互に影響を及ぼすこととなる。

人間はその属する群のそれぞれの中での位置に関する欲望を持ち、また、それぞれの位置が相互に制約となる状況の下にある。結果として人間は複雑に関連する多様な欲望を持つこととなるであろう。この、生産社会の中での欲望の複雑さについては、項を改めて議論したい。

言語を持つ人間、また、複雑な社会を持つ人間は、複雑な欲望体系を持つと同時に、対象間／記号間の関連から、存在者とその言語記号、また言語記号同士の間の意味の推移を伴う指示関係を発展させることにより、存在者に対して多様な意味を付与することになる。

5. Heidegger の Es と Freud の Es

Heidegger はその後期思想の中で、“Es gibt Sein”および“Es gibt Zeit”という表現を用いて存在と時間について述べている。しかし、ここで“Es”によって指示されているものは一体なんだろうか。また、そもそも二つの表現に現れる“Es”は同じものを指示しているのだろうか。

これまでの検討結果からは、存在者に意味を与え、存在として認識させるものは主体の欲望であった。あるいはもう少し遡れば、欲望の大元となる動物の行動への衝動、Dawkins のいわゆる利己遺伝子だということになる。

ところで Freud は人間の欲動の元となる動物的衝動を Es という語で示しているが、してみると二人の使用している Es が指示するものは異なるものではない。意味としての存在を与え、主体に行動を促すものは利己遺伝子であると言える。

それでは時間についてはどう考えるものであろうか。主体が時間を意識するということのそもそもの始まりを考えるならば主体の感覚、あるいは身体的姿勢の変化がその基底にあると考えるべきであろう。しかしここでも、主体がそれらの変化に何の興味も持たないならば、その変化が主体に影響を及ぼすとは考えにくく、主体にとっての意識に影響するとは考えにくい。これらの変化は主体にとってどのような意味を持つのであろうか。

生まれたばかりの人間というものを考えるなら、未だに何の学習をしていないにも関わらず、身体的感覚と姿勢に関して、快／不快という形での評価基準を既に備えていると考えざるを得ないであろう。

してみると、人間にとって感覚と身体姿勢の変化に伴って快／不快の状態が変化するなら、それはそもそも重要な意味を持つことになる。すると変化としての時間に意味を与えるのは、最初の段階では感覚と姿勢に関する評価であると考えられる。

主体はやがてこの原初的評価基準を用いて、認識や行動のより高度な様式を学習していくことになる。これは、動物一般についても、利己遺伝子を保存するためのより有効な手段を獲得することでもある。また、認識と行動のより高度な様式が獲得されるということは、時間概念についてもより高度なものに洗練されていくことでもある。ここでも時間概念が成立する根底には動物の原初的行動衝動としての利己遺伝子があるということになる。

結論としては Heidegger と Freud では、Es の指示する対象は基本的に同一のものであると言えるであろう。

参考文献

小山照夫、言語と人間、<http://research.nii.ac.jp/~koyama/official/lang/pdf/lang.pdf>

小山照夫、物語の意味論、<http://research.nii.ac.jp/~koyama/official/lang/pdf/fiction.pdf>